



WE, JOKERS

英語のジョークを楽しむ会会報

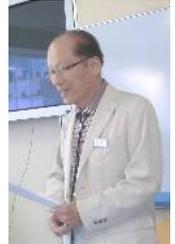
No.31 June 30, 2012

THE 5TH ANNIVERSARY SPECIAL ISSUE

- ジョークの心得三か条:
1. ジョークは心のゆとりであり、人生の潤滑油です。
 2. ジョークで言語の壁に挑むのは知的快感です。
 3. ジョークは簡潔が至上です。

Lady Mondegreen は殺された? —mishearing が起こす笑い

宮本倫好



この会が出来たのは、2007年3月31日で、今日は創立五周年記念の研究発表会ということです。あの頃は、私の髪も今よりはふさふさしておったなあと思います。(笑い) それから五年が経ち、私は内も外も衰えました。しかし、この会は順調に発展を続けていることを思えば喜びに耐えられません。英語のジョークをまともに取り上げてこうした研究会を続けているのは、日本でここだけではなかるうかと思えます。

皆さん、受付で御本を受け取られたことと思えますが、これは、会員である土屋政雄さんからのプレゼントでございます。記念の会に華を添えて頂きまして、まことに有難うございます。(拍手) ご承知の通り、土屋さんは我が国有数の翻訳家でいらっしゃいます。

今日のお目出度い日に何かしゃべるように言われてここに立っておりますが、実は私は前座専門です。昨年も、大島希已江先生が、英語落語を語って下さいました時も、私が前座、大島先生がトリでございました。

前座には心得というものがありまして、まず、面白過ぎてはいけないということがあります。(笑い) しかし、面白過ぎてもいけない。「木戸銭を返せ」という声が聞こえてきます。その間合いが難しいのであります。三遊亭円乗という噺家を書いていましたが、「前座に幸

せはない。あるのは精進のみ、修行のみ」だそうです。今回も、そうした修行に努めたいと思っております。

●Lady Mondegreen とはそもそも何者?

さて、本題に入ります。お手元の資料をご覧ください。タイトルに「Lady Mondegreen は殺された? —mishearing が起こす笑い」と推理小説まがいの惹句を掲げましたが、これは、客を惹きつけたいという一心から出たものです。それによって、芸のまずさを補おうということなのです。

もし、皆さんの中に、「Mondegreen は知ってるよ」と仰る方がおられましたら、私はその方を尊敬いたします。私が彼女と知り合いになったのは、十年ほど前に etymology、つまり語源についての本を書くためにいろいろ調べておった途中のことです。Mondegreen という言葉は、辞書を引いても出てまいりません。やっと最近の辞書には出るようになりました。彼女はいったい何者でありましょうや。

アメリカの作家に Sylvia Wright という人がいまして、1954年に、Harpers Magazine に書いたエッセイがきっかけであります。

“When I was a child, my mother read to me her favorite 17th century Scottish ballad. ~They have slain the Earl Amurray, and

Lady Mondegreen.

こういうふうに彼女は聞いたというのです。そこで彼女は歌の内容をいろいろ想像しました。「伯爵が殺されて、レディ・モンダグリーンも殺された」。二人の間柄はどういうものだったのだろう、と彼女は幼いなりに想像して、やがて大人になったある日、このスコットランドのバラッドを読む機会がありました。するとそこには、Lady Mondegreen が消えていました。They have slain the Earl Amurray, and laid him on the green. (彼らは、伯爵を殺して、その死体を草地の上に置いた) ということだったのです。

●ウサギ美味しい蚊の山

そこで、ライトは、こうした mishearing や misinterpretation というものは、世の中にたくさんあるに違いないということに気づきました。特に子どもの時に聞いた歌などの中に多く見られる現象ではないかと考えたのです。そこで彼女はこの現象を mondegreen と名付けて、ことある毎に書いたのですが、なかなか世に認められるところに至らず、辞書の見出し語になるということもありませんでした。

やがて、他にもそうした現象に気づく人が出てきて、いろいろな例を記録するということが行われるようになりました。そして半世紀後に、やっと、Merriam-Webster College Dictionary (2008) に始めて entry されました。

詩や童謡の中でよく理解できない言葉にぶつかって、分からないままに理屈をつけるということはよくあることです。それを mondegreen と呼ぶようになったのですが、中々他の辞書には採用されませんでした。私たちの身の回りにもよくあることです。例を挙げてみましょう。

日本語の例：(童謡) * 〈浦島太郎〉～帰ってみれば、こわいかに→**恐いカニ** * 〈ウサギ追いし彼の山〉→**ウサギ美味しい** (小鮒も釣つ



て食べよう) * 〈卒業式〉**揚げば尊し**我が師の恩→**扇げば尊し**和菓子～ * 〈赤蜻蛉〉夕焼け小焼けの赤トンボ、負われて見たのは→**追われて**(トンボの大群に)(流行歌)* 青江美奈 (池袋の夜)他人のままで別れたら良かったものを、もう遅い→**別れたが**～ * 小坂明子〈あなた〉赤色のバラと白いパンジー→**パンティ** * 〈帰れソレントへ〉**ロシア民謡**と。(ソ連と出てきたのだからロシアのことだろう)

先日、向田邦子のエッセイを読んでいましたら、「わらべは見たり**野中のバラ**」を、向田さんは「**夜中のバラ**」と思い込んでいたそうです。おそらく皆さん方もこうした経験はおありのことと思います。

●Mondegreen の市民権獲得運動

それならば、mondegreen を普通名詞扱いにしてもいいのではないかという主張がしだいに出てきたのです。最近私が見た中には、この言葉を「聞き間違える」という意味の他動詞として使っている例がありました。

日常会話の中ばかりではなく、lyrics, folk music, parody, comedy, novelty, music さらに literature, TV etc. に拡大して行っているようです。

さらには、deliberate mondegreen, (わざと間違える) というものもあります。これはわざと間違えて笑いを取るのです。タモリの番組に「ボキャブラ天国」というのがありました。わざと間違えて笑いを取る例を、視聴者からの投稿をもとに発表するのですが、これがなかなか人気があって、けっこう続いたようです。

double entendre というのは、二つの意味に取れる言葉のことです。malapropism, は、滑稽さを狙ってわざと間違えること、mumpsimus というのは間違っているのに「いや正しい」と言い張る滑稽さのことです。

このようにして、mondegreen 現象が、言葉というものの持つ面白さに注目させるきっかけとなり、独立した学問研究対象になりつつ

あるということです。

この現象を心理学的に眺めると、子ども時には、未知の言葉に出会った時に、自分の持っている過去の経験や、知識を基にして、自分なりにその意味を判断します。その解釈は、概して原詩、元歌に劣ることが多いのです。

しかし、これを **negentropic** という術語（これは物理学の **entropy** をもじって作られた用語だそうです）を用いて、「最初もそれなりに合理的だが、段々整然とした解釈に近づいてくる。しかし、元の意味とは、かなりの隔たりがあって、その隔たりの幅が大きいほど、意外性が感じられて面白い」ところに価値を見出そうとするのです。

これを図式的に表現しますと、**nonsense** から **sense** への、**nondirection** から **direction** への移行と言えらると思います。つまり、**Mishearings are the wrenching of nonsense into sense.** というわけです。

本来ナンセンスであったものを、無理矢理自分の頭の中で意味づけすることから生まれるユーモアというほどの意味であります。

●意味のズレこそいみじけれ

次に、私が収集した **mondegreen** の例をお目にかけます。素材にしたのは、**The San Francisco Chronicle** で、これは地方紙としてはかなり良質の新聞であります。そこに、**John Carroll** という人がコラムを持っています。このコラムに全国から **mondegreen** の体験が寄せられて来るため、延々と続いて、同紙の呼び物になっているといいます。この新聞を中心に、私が集めたものをご披露いたしましょう。

* **Rolling Stones** 〈**Paint It Black** Lyrics〉 “I see a red door and I want it painted black”

→ “I see a Renoir and I want it painted black.”

私はルノワールの絵を見たが、それが黒の色調だったほうが良かったなあ



* **Go-Gos** 〈**Our lips are sealed.**〉 “Our lips are sealed” → “*otters and seals*”

ここでちょっと脱線します。先の戦争が終わってから、初めて日本人も出席できる国際会議が開催されることになりました。出席した人の話によると、それはオットセイに関する国際会議だったそうです。戦争中は英語禁止でしたから、新聞記者でも英語のできない人がたくさんいました。その記者は、「オットセイ」は英語だと思っていて、その会議の中でいくらアクセントを変えて「オットセイ」と発言してもまったく通じなかったところへ、外務省の人に「オットセイは英語じゃありません。Sealsと言います」と教えられたという、まことにのどかな時代もありました。

そこで私は「オットセイ」は何語だろうかという疑問を起こして調べてみました。もともとはアイヌ語で、「アネット」と言ったのを、中国語で「臘臍」と書いたものだそうです。その後オットセイの臍の部分が漢方薬としてたいへん効果があるものだということから、その臍を表わす文字がそのまま動物本体を表わす言葉になって日本に入ったということです。

* **The Bible**: “Gladly, the cross I’ll bear” → “*Gladly, the cross-eyed bear*”

イエス・キリストが「私は喜んで十字架を背負う」と言った言葉が、「斜視の熊」と聞こえたというものです。

* **Lyrics** 〈**It’s Friday. I’m in Love** by the Cure.〉 “It’s such a gorgeous sight to see you eat in the middle of the night.” → “~ *to see you eating the pillow tonight.*”

「枕を食べる」と言ってもそんなことがあるでしょうか。そんなふうに聞こえたことを何とかして意味づけしようとした結果だと思えます。

* **Jimmy Hendrix**: 〈**Purple Haze**〉 “Scuse me while I kiss the sky.” → “*Scuse me while I kiss this guy.*” これではゲイどうしになってしまいます。

* Eric Springsteen lyric “Tenth Avenue freeze out.” → *“Ten devils in the freezer.”*

* Peter Frampton “Oooh baby I love your way” → *“Oooh baby I love your weight.”*

これはなかなか面白いと思います。相手の女性が痩せているのか太っているのか分かりませんが、もし太っているとしたら、お世辞で「太めのキミが良いのよ」と言ったのでしょうか。

* Creedence Cleawa 〈Bad Moon Rising〉
“There’s a bad moon on the rise.” → *“There’s a bathroom on the right.”*

これはまったく別に聞こえたのですが、筋がきちんと通っているのが見事です。Mondegreen の傑作と評価されているものだそうです。



* Mike Farrow 〈One Ton Tomato〉 “My baby likes the Western movies.” → *“My baby’s like a wet sock moving.”*

これはどんな意味になるんでしょうね。

* Beatles 〈Lucy in the sky with diamonds〉
“the girl with kaleidoscope eyes” → *“the girl with colitis goes by”*

「万華鏡のようにきれいな目をした女の子が、
「大腸炎を患っている女の子が通り過ぎる」
になってしまいました。

* 〈the Pledge of Allegiance〉 “I pledge allegiance to the flag of the United States of America and to the Republic for which it stands, one nation under God, indivisible, with liberty and justice for all.” → *“I pledge a lesion ~ to the republic for Richard Stans, one naked individual, with liver tea and just this for all.”*

これは意味が分からないままに、子どもの時から学校で教わって暗記させられますから、こんな珍解釈が生まれました。The Republic for which it stands が the republic for Richard Stans になり、one nation under God が one naked individual となり、with liberty and

justice が with liver tea and just his となりました。Liver tea とは何でしょう。肝臓に効くお茶でしょうか。

* “Australians all let us rejoice, for we are young and free; we’ve golden soil and wealth for toil, our home is girt by sea.” → ~ *“with gold and soil and wealth for toys, our home has girls like me.”*

Our home is girt by sea の girt は動詞 gird (取り囲む) の過去分詞ですが、子どもには難しい語だと思います。それで、our home is girt by sea が our home has girls like me になってしまいました。

* 〈Christmas carol〉 “Silent night, holy night. All is calm, all is bright. Round yon Virgin Mother and Child.” → ~ *“Round John, Virgin Mother and Child”*

ここでは、yon (=yonder) が John 、つまり「太ったジョン」になってしまい、投稿をした人は「太ったジョンと、聖母マリアと子ども」がどうして並んでいるのかと疑問に思ったそうです。

こうして調べていきますと、私は実はほっとしたのです。と言いますのは、我々にとっては英語の hearing や listening はなかなか難しいものですが、native でもこんな間違いをするのかと思ったからです。

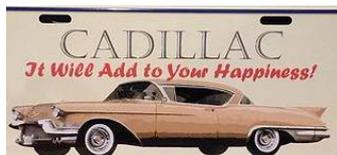
●難解 Mondegreen 集

それでは次に、それは間違いですよと指摘されても、すぐにああそうですか、と答え切れないもの、すなわちバックグラウンドを知っていなければ理解できないような複雑なものをご紹介します。Don Henley という人の 〈The boys of Summer〉 という作品の中から見つけたものです。

“Deadhead sticker on a Cadillac. You can never look back” というのが元の文です。これを “dead head sticking out a Cadillac” と聞いた人がいて、「自分はこの歌を聞くたびに気持ち

の悪い思いをした。キャディラックから死人の首が突き出ているなんて」ということなのです。

しかし、私はこれでは分かりません。元の Deadhead sticker on a Cadillac というのが何のことか分からないからです。そうすると、In the 60s there was a band, the Grateful Dead with Jerry Garcia. という事実にとどり着きました。



そのバンドのファンが、The fans were called 'Dead-heads' who were hippies. Having a deadhead sticker on a Cadillac means we've grown up but are still hippies at heart. Always go forward. つまり、「我々は皆、キャディラックに乗れるほど出世したのだが、心の中はまだ昔のままのヒッピーだぞ。いざ前へ進め」というわけです。

こういうふうに、間違う前の元の文句が何であったかを理解することだけでは、この mondegreen の意味は分かりません。元の文句のバックグラウンドまで理解しておく必要があります。

次に malapropism についてお話しします。これは、「滑稽な誤用」という程の意味です。つまり話をおもしろくするために、わざと間違えることです。

アイルランドの劇作家 Richard Sheridan の芝居に *The Rivals* (1775) というのがあります。

その中に Mrs. Malaprop なる人物が登場して、「滑稽なる誤用」を頻発することから、この用語が生まれたわけです。たとえば、こんな具合です。



“O, he will *dissolve* (resolve) my mystery!” “He is the very *pine-apple* (pinnacle) of politeness.” “I am very sorry to say that my *affluence* (influence) over my niece is very small.”

本来なら *resolve* と言うべきところで *dissolve* と言い、*pinnacle* と言うべきところで *pine-apple* と言い、*influence* と言うべきところで *affluence* と言うことによって笑いを取るわけであります。

芝居だけでなく、小説の中にも同じ現象が見られます。世界でも日本でも名高い青春小説の「ライ麦畑でつかまえて」(『*The Catcher in the Rye*』) の中にはこんな箇所があります。

ところで、西洋でも日本でも麦畑というのは *sexual* な *implication* があります。江戸時代の川柳にも「麦畑ざわざわざと二人逃げ」「麦畑 案山子の前もはばかりず」などというようなものがあります。現代でも、およねーずというグループが東北弁で「愛の花咲く麦畑～」と歌う歌があります。

著者の J. Salinger は、Robert Burns の有名な “If a body meet a body comin’ through the rye ~” を “*If a body catch a body comin’ through the rye ~*” と変えたわけです。私はそれを調べてみたのですが、解説には、江戸の川柳と同じような状況が想定されていると書いてありました。

ところが実際は、サリンジャーのパロディの方には、そうした場面は描かれておらず、むしろ、青少年たちがふとしたはずみで、崖っぷちから落っこちそうになった時、彼らを支えてあげるような人間に自分はなりたいたんだ、という主人公の言葉が出てきます。



*Malachy McCourt (『*A Monk Swimming*』) The Catholic prayer, Hail Mary “Amongst women” → “*A Monk Swimming*”

つまり、Amongst women を a monk swimming と聞き間違えたのです。

次は、mumpsimus vs. sumpsimus です。これは、Eucharist (聖体拝受) で使うラテン語ですが、ここに出て来る牧師が、sumpsimus

と言うべきところをいつも *mumpsimus* と間違えて唱えて来た。

ある時、上役からそれが間違いだということ指摘されても、“*I will not change my old mumpsimus for your new sumpsimus.*” と言い張って誤りを正そうとしません。

そこから、*mumpsimus* (普通名詞：非合理だが、頑固に維持される考え)という単語が生まれたということなのです。

私は漢字の文化から来る宿命というものをいつも感じております。この間私の友人の奥さんがガンの手術をしたというので、お見舞いの電話をして、ご容態をお訊ねしたところ、「やっとジュウユが飲めるようになりました」という返事が返って来ました。

たぶんこれは「重湯」の間違いだろうと思ったのですが黙っていました。この方は一流企業の役員をやっていた方ですが、これまで間違えても、周りの人はだれも言ってくれなかったのだらうと思います。たぶんこの先も墓場まで持って行かれるでしょう。

また、私の知り合いの有名な女性の政治評論家が、先日テレビで語っていましたが、「更迭(こうてつ)」のことを「こうそう」と発音しておりました。最初は「抗争」のことかと思って聞いておりましたが、何度もそう言うので、「こうてつ」の間違いだと気が付きました。

また、中野翠さんのエッセイを読んでおりましたら、こんな逸話が出てきました。さる一流出版社の編集長が、「この原稿はなかなか良いが、一つだけ気に食わないところがある。それはキノイという言葉が何度も出て来るが、キノイの人物がまったく描かれていないことだ」と言ったというのです。もちろん、これは「木乃伊(ミイラ)」のことです。

私は、この言葉はどこから出たかを調べてみました。エジプト学者が *mummy* と呼んだものを漢語に訳した時に「木乃伊」という文字を当て、日本に入ってきた時には、文字は「木乃

伊」を採用し、発音の方はもとの「マミー」を用いたという訳です。もともと無理な組み合わせだったのです。

しかし、この種の読み間違いは私たちの身の回りにいくらかあることです。麻生元首相ばかりではなく、インターネットに「漢字読み間違い(女子アナ編)ー顔写真付き」というのを見つけましたので、その一部をご紹介します。

*訃報(とほう) *西瓜(にしづめ) *平将門(へいしょうもん) *席卷(せきまき) *無理強い(むりつよい) *唐突(からとつ) *生体肝移植(せいかんたいいしょく) *浪速(ろうそく) *元凶(がんきゅう) *化身(かしん)

最後に、私自身へ戒めも含めたこの格言で締めくくりといたします。

To err is human, to repent is divine, to persevere is diabolical. (過ちは人の常、悔い改めは神に近く、押し通すは悪魔の性)

これは Benjamin Franklin が好んだ言葉です。前半の *To err* から *divine* までは 18 世紀英国の詩人 Alexander Pope の言葉 (*To err is human, to forgive, divine.*) として有名ですが、フランクリンはそれに後の部分を付け加えて使ったようで、現在では、彼の言葉として残っています。

そろそろ、お後がよろしいようで。(拍手)

司会(豊田)：言い間違いの例をひとつ。私の孫が「万歩計」のことを「散歩計」と言いました。これは座布団三枚に値すると思いますがいかがでしょうか。(拍手)

土屋政雄訳 特別プレゼント図書一覧

アーネスト・ヘミングウェイ 『日はまた昇る』[新訳版]

カズオ・イシグロ 『日の名残り』

カズオ・イシグロ 『わたしを離さないで』

マイケル・オンドーージェ 『イギリス人の患者』

フランク・マコート 『アンジェラの祈り』※

(早川書房刊、※のみ新潮社刊)

ジョン万次郎と英語

乾 隆

(東京家政大学人文学部教授)

豊田 (司会) 私が昨年まで会長を務めておりましたさる英語教育学会で、乾先生にお話をして頂いたことがございました。それはたいへん面白いものでした。ジョークではないけれども、別の面白さがありました。そこで今日は、ジョークではないけれども、英語に関わる面白いお話ならこの会でして頂く意味があると考えまして、先生のご講演をお願いしたわけです。私は、乾先生のことを昔から存じ上げておるのですが、それにも関わらずよくは存じ上げない、という奇妙な関係にあります。(笑い) したがって、この際、自己紹介も兼ねてお話し頂くのがよろしいかと思えます。先生お願いいたします。

乾 ニーハオ。純粹の日本人の乾と申します。東京家政大学という所で教鞭を取っております。



大学では毎年新学期に新しい時間割が配られます。そうすると学生たちは「あ、今度の英語の先生は、どうも中国人らしい」と噂しているようです。そこで、私が教室へ入って行きますと、「やっぱり中国人だ」(笑い) と言っているようです。

ネイティブの英語の先生からも、あなたは何人ですかと聞かれるので、「私は純粹の日本人だ」I'm a pure Japanese. と答えるつもりで、つい I'm a poor Japanese. と言ってしまいます。(笑い) つくづく英語の発音は大切だと思います。教えているのは、音声学というものです。家政学ではなく、音声学です。(笑い)

私がジョン万次郎のことに興味を持ち始めたきつ

かけは、彼が「ホッタイモイジルナ」と言ったということが伝えられているからです。これは、文献には記録されておりませんが、噂としては定着しているものです。それで、彼が書いた『英米対話捷徑』という本を研究して一冊の本にまとめたものが豊田先生のお目に止まり、先生の学会でお話をいたしました。

■おやじギャク概論

先ほど宮本先生のお話をお伺いして、「非常に高尚なことをやっているんだな」という印象を持ちました。私は普段ジョークをよく言うのですが、それを学問的に突き詰めてみるということはしたことがありません。せいぜいやっておりますのは、お配りした「下手なシャレはやめなシャレ」(笑い) というタイトルのハンドアウトにあるようなことです。

どうせ言っているのなら、書き留めておこうと思いついて、シャレのメモのようなものを作りました。また、ただ書き連ねるというだけではつまらないので、ここにありますように、「スポーツ篇」とか「食べ物篇」などと、テーマ別に分類してみました。

こうしたシャレは、別名「おやじギャク」と申します。「おやじギャク」というものは、ぴしっと決まっていはいけないのだそうです。聞いた人から、「何これ？」と揶揄されるようであればいけないのだそうです。(笑い) したがって、ここに挙げたものも、玉石混交です。昨夜プリントしておまして、自分でも「よくもこういうものを書いたものだ」と思ったのもありますし、「まあ、いいかな」と思ったものもあります。

この会では、ジョークを英語で言わなければいけ

ないようですが、「食べ物篇」の「飴」の項にある「甘め一飴はアメイジングなおいしさ」には、ちゃんと英語が入っております。次の「苺」は「この安さ、苺一円（一期一会）またとなし」とあります。「いか」は「このイカはいたんでる。それはイカン」です。

雑篇の「愛す」の項に「吾は氷を愛す (ice)」とありますが、これにも英語が入っています。島倉千代子の歌に「からたち日記」というのがあって、「からたちのトゲには腹立ちますねえ」とか「彼女無くカラタチのむなしさ記す、からたち日記」とあります。「カラタチ」というのは男性でないと分からないかも知れませんが。(笑い) また、「志賀直哉」の項に「志賀直哉の処女詩集は道程。では童貞は英語で？ ポール・ニューマン」。

実は、人名が入ったダジャレはよく受けるのです。「名前篇 (姓)」をご覧ください。私の同僚に「新井先生」という方がおられますが、よく学生が「新井先生いらっしゃいませんか？」と聞きに来て、「あら、居ただけどね」とか、「あら、居ないわね」と答えるとダジャレになります。昔なつかしい「大川橋蔵」など、そのままダジャレになる芸名です。

熊田曜子さんというタレントさんがいますが、「熊田曜子は小悪魔だ」これは、どこがシャレになっているか分かりますか。次は「清水さん」です。今時女性の下着をシミーズと呼ぶのは古いのだそうですが、「清水 (シュミーズ) が見えていますよ。清水さん」とか。一番下の、「渡辺さん」の「この土鍋、渡辺が割った鍋」など、典型的な「おやじギャク」だと思います。「名前篇 (女)」の、「まりや」の項、「マリヤ様に誤りや無し」などはいかがでしょうか。

「鉄道篇」に移ります。駅名を聞いていると、いろいろ面白いものがあります。「まあきれい！ 桜田門の桜だもん」(笑い)「九段下」は「英霊が下んしたこの平和」。これは若い人にはよく分からないかも



しれません。

「都道府県篇」の「青森」は、「あ、大盛りのリンゴはやっぱり青森リンゴ」、福井県の県花は水仙だそうですので、「ふくいくと咲いて水仙、福井の県花」となります。こういうのはきれいすぎてダメなんです。

(笑い)香川県は「蚊がわいた、溜め池多し香川県」。徳島県は「得しましよ 踊らにや損の阿波踊り 踊る阿呆に見る阿呆」「疾くしまえ、鳴門秘帖は隠すべし」。沖縄県は「沖縄の翁は長生き いくさ越え」という具合です。

■大学教授の哀歓

さて、大学の 90 分授業というのはとても長いですね。ですから教材をいろいろ変えて、目先を変えてやらないともちません。そこで私は、昔の田舎の映画館みたいです、三本立てでやっております。

先ほど宮本先生から、アナウンサーの誤読のお話がありましたが、先日茨城県に竜巻が起こった時、茨城県は震災の被害も多かったものですから、NHK のラジオのアナウンサーが、津波と竜巻をいっしょにしてしまって、「立浪がやって来ました」(笑い)とっていました。男性のアナウンサーでしたけれど、訂正せずに、「立浪」で通していましたので、ちょっと驚きました。

さて、英語のジョークのことですが、先日外国人とお茶を飲んでおりました、My tea is stronger than yours. と言いました。狙い通り Why? と怪訝そうに尋ねてくれたので、Because this is all my tea, almighty. と答えました。

また、最近、海外研修ということで、学生の引率をして海外へ出掛けることがよくあります。ところが、ほとんどの先生が行きたがりません。ごく一部の方しか行きたがらない。私はどちらかと言うと行きたい方なのですが、あからさまにそうは申しません。依頼を受けると「えーっ、また私ですか!？」とか言っておりますが、心の中では喜んでおります。そして、「仕事でございますから」とか言って、いかにも仕方なさそうに引き受けるのでございます。

海外に行って何が楽しみかと申しますと、受け入れ校の先生方とお酒を飲んだりすることです。また、連れて行った学生たちと同じ寮の中で生活しておりますから、普段は分からないような彼らの生態が分かります。それがなかなか面白いのです。学生と話を合わせるため、彼女たちがどういうことに関心を持っているかを知るよう努めております。女子学生ですから、買い物が好きですね。それも、せっかく来たんだからということで、ブランド物を買います。私はブランド物と言えば三越のちりめんぐらいしか知りませんでした。また、最近の物は、みんなカタカナですので、憶えるのが大変です。

ルイヴィトンというのがありまして、そのマークが私には XL と書いてあるようにしか見えません。そこで学生に「君も XL を持っているのか」とたずねましたら、「ヴィ



トンでしょう、先生！」と鼻で笑われました。「スルメでなく、あエルメスね」とか、「愛媛でなく、コーチね」とか言って誤魔化しております。

同じ寮に居ますから、だんだん親しくなってきた、「お茶を飲むかい。入れてあげよう」と言っても、学生はただ「大丈夫です」と答えます。「アイスクリームは？ 食べるかい」と聞いても「大丈夫です」と申します。私は何が大丈夫なのかと思ったのですが、これは、「要りません」という意味なのです。No thank you.ということなのです。

始めのうちは「大丈夫です」と短く発音していたのが、そのうち「大丈夫で～す」と延ばして言われるようになります。そこでこちらは何だか馬鹿にされているような気持ちになってまいります。「ケーキあるよ」「大丈夫で～す」。そこでカチンとききて、「大丈夫です」は英語にすると I'm all right です。しかし、何が大丈夫なのかは、こちらには分かりません、と注意をすると、学生達は、「ふつうに使うわよね～」という具合です。まるで、「これを知らないのはオヤジのあんただけだ」という調子です。

また「ふつう」というのがくせ者でございまして、「ふつうに美味しい」というのは、「けっこういける」という意味なのでございます。「彼氏ができたって、好きなのかい？」と聞きますと「うん、ふつうに好き」と答えてきますが、これは「まあ、そこそこ好き」という意味です。「お父さんは良い人ね」「まあ、ふつうかしら」という具合です。とは言いまして、就職の面接でお茶を勧められて「大丈夫で～す」なんて答えると一発でバツでしょう。何と言っても面接するのは、私みたいなおっさんばかりなのですから。そこで、学生にそう言うと、明るく「は～い」とか答えるんですが、本当に分かっているのかどうか。

さて、海外研修の引率に行きますと、向こうの若い教員たちともお酒を飲んだりします。相手にウィスキーを勧めようと、Would you like some more whiskey? と訊ねますと、I'm all right. (大丈夫で～す) と答えたので、「お前もか！」という気持ちになりました。私が驚いていましたら、I'm sorry. と謝って、No, thank you. と言うべきだったと申しますので、「ああ、I'm all right. は、やはり正式な言い方ではないんだ」と納得が行きました。よく使われてはいるそうですが、くだけた言い方で、イントネーションも尻上がりになります。「大丈夫で～す」と同じですね。

せっかくイギリスに来たんだから、イギリス的な物を何か買おうということになりまして、私はトップハットとステッキを買いました。卒業式などの正式の場でかぶろうと思ったからです。日本への帰りには、トップハットはスーツケースの中に入れ、別の黒い中折れ帽をかぶりしました。しかし、ステッキは入りませんから、機内に持ち込み、成田に着いてからも持って歩きました。

すると、電車の中でみなさん私の方をちらちらと見るんですね。近くにおられたきれいな若奥様が、熱心にこちらを見られます。そのうち、目が合っても目をそらさないの、私は「もしかすると、私の

大学の卒業生かな」と思いましたが、そのようでもありません。それから斜め前にいた女子高生も私の方をちらちらと見ます。いや、弱ったな、自分はそんなにいい男なのかな、と思っていると、おもむろにその女子高生は立ち上がり、私に話しかけてきました。「あの、お座りになりませんか」。どうやら、身体障害者のように見えたりしいのです。若いのに杖をつけていますから、同情の眼差しだったのです。そこで私はステッキを顔の前で左右に振りながら「大丈夫で〜す」と答えたのであります。

先日、勤務先の大学が勤続 20 年の表彰をしてくださりましたので、モーニングを着て、白手袋をして、トップハットをかぶり、ステッキを持って式場に入って行きました。それを見て、表彰状をくださりながら理事長が、一生懸命に笑いをこらえていました。

■ジョン万次郎漂流記

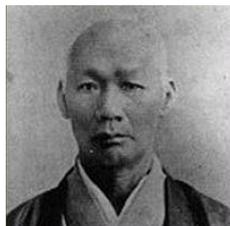
さて、いよいよ本題に入りまして、幕末の国際人ジョン万次郎のお話でございます。

ジョン万次郎の話はいろんなところでなされております。

昔は歌舞伎にもなりました。今ではミュージカルにもなっております。そのうち NHK の大河ドラマにもなるのではないかと思います。

「大阪維新の会」を率いる橋下さんが、いつか「船中八策」ということを唱えておりました。これは、五箇条の御誓文の元となった八箇条からなる文章で、坂本龍馬と後藤象二郎が九州から大坂に向かう瀬戸内海の船の中で作ったものです。それを文書にして、後藤が主君である山内容堂に出し、それが大政奉還の建白の理論付けになったというものです。大河ドラマでは、龍馬をたいへんな先見性を持った人物のように描いておりましたが、「船中八策」などは、ジョン万次郎を通して得た知識が基になっていたのです。

ジョン万次郎は正式には中濱萬万次郎といひます。



ジョン万次郎という名は、昭和になってから井伏鱒二が書いた『ジョン万次郎漂流記』に由来するものです。それまでは「ジョン万」と呼ばれて、本人もその呼び名がたいへん気に入って、英語の署名などにも「ジョン万」を用いておりました。

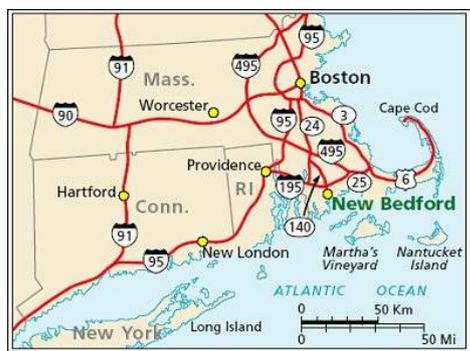
彼は、1827 年（文政十年）土佐の国、現在の高知県土佐清水市の貧しい漁師の家の次男に生まれました。長男は病弱でしたので、彼が一家を背負って働いておりました。14 歳の時に、仲間四人と共に漁に出て嵐に遭い、乗っていた長さ数メートルの平底船が漂流し、鳥島という無人島に漂着しました。その島で、アホウドリを取ったり、貝を拾ったりして飢えをしのぎながら、半年ほど経ったところで、アメリカの捕鯨船に救われました。船長をホイットフィールドと言います。

しかし、当時の日本は鎖国の時代でしたから、万次郎たちを郷里に送り届けることはできません。「外国船打払令」もございましたし、異国に行つて帰つて来た者はたちまち処刑されてしまいます。ホイットフィールド船長は、そうした事情を知っておりましたので、万次郎たちをそのまま捕鯨船に乗せて航海を続けました。仲間の四人は、船がハワイに立ち寄った際に下船しました。日本に近い分、帰国のチャンスが大きいだろうと考えてのことだったのでしよう。

郷里では寺小屋にも行かなかつた万次郎でしたが、聡明な子でしたので、船中で英語をどんどん覚えていき、船長にもたいへん可愛がられました。14 歳という年齢は、外国語を自然に身に付ける臨界期 (critical period) と呼ばれていて、その時期を越えるとなかなか困難になってまいります。その点彼は幸運だった訳です。

彼を気に入った船長は、ハワイに着くと、彼にアメリカまで「ついて来るか」と訊ねました。一方で船長は、漂流した仲間の最年長者にそのことの可否を訊ねますと、「万次郎は母親から預かつた子ですから、軽々に行かせる訳にはいかないが、本人が行き

たいというのなら、いたしかたございません」という返事でした。



こうして万次郎は、捕鯨船での仕事を手伝いながらアメリカ本土に向かい、難破してから約二年後に、マサチューセッツ州のベッドフォードに入港しました。ホイットフィールド船長は万次郎をその地の商船学校に入学させようとしたのですが、校長からもっと英語に熟達してからと断られました。

そこで船長は、万次郎を土地の小学校に入学させました。すると彼は、乾いた土が水を吸うようにめきめき能力を伸ばして行きました。また、彼自身の中に、アメリカで学んだ知識を日本に帰国してから、郷里の人びとに伝えたいという気持ちが芽生えてきたようでもありました。一種の使命感と言えると思います。と言いますのは、やがて帰国した時、彼はアメリカの書物をたくさん持って帰ったからです。自分だけが知識を習得して満足するのではなく、郷里の人びとにもそれを伝えようとしたのです。

やがて、彼の学力が認められ、当初志望だった高等商船学校にも入学することができました。そこでは数学・測量術・航海術などを学びました。今でいうと理科系のバリバリというところです。そして首尾良く一等航海士の免許を取りました。その頃には、彼を鳥島で救い上げた捕鯨船の船員のある者は船長に昇格しており、万次郎に、自分の船に乗り組まないかと誘ってくれました。万次郎の人柄だけではなく、彼が身に付けた航海士としての技倆が高く評価された結果でしょう。

そこで彼は、その船の乗組員として3年間世界を

股にかけて航海をしました。その間に世界の情勢のみならず、世界の中での日本の位置、また日本が外国からはどんな国と思われているかなど、肌を通して知ることができました。今の言葉で申しますと「国際感覚」を身に付けた、ということになります。彼は単なる漂流者ではなかったのです。

とは言うものの、彼は、やがては帰国したいという願いを捨てることはありませんでした。そして、そのためには、お金を作らなければならないことも自覚するようになりました。

捕鯨からマサチューセッツ州に帰りましたが、時あたかも、アメリカは1849年のゴールドラッシュに湧いていました。そこで万次郎はあの歌にも歌われた **forty-niners** の一人になったのです。万次郎が居たのは東海岸であり、ゴールドラッシュは西海岸

のカリフォルニアでの出来事ですから、彼は大陸を横断しなければなりません。そのルートは三つ考



えられました。まず、幌馬車などに乗って大陸を陸路で横断する。次には、パナマ地峡を越える。最後に、南米大陸をぐるりと回って行くというルートがあります。3番目のルートは最も時間のかかる経路です。ところが、彼が選んだのは、この南回りルートでした。なぜかと申しますと、彼は南回りの航路の船員として雇って貰い、給料をもらいながら旅をするという方法を取ったからです。

また金の採掘に必要な道具類を準備しなければならないという問題もありました。彼はそれらの道具類をあらかじめ東海岸で購入しておいて、自分が乗り組んだ船に積み込んでもらいました。それらの採掘道具類を現地で購入しようとしますと、たいへん高価であります。そのことを、彼は東海岸で新聞を読んで知っていました。つまり「時事英語」による情報収集力にも長けていたということになります。

カリフォルニアで金鉱掘りをして財産を作った万次郎は、東海岸へは戻らずにハワイへ渡りました。ハワイには漂流仲間の4人が暮らしているはずですが、その内の一人は病死し、3人だけが残っておりまして。万次郎には、自分ひとりだけが帰国するのではなく、仲間の3人をもいっしょに連れて帰りたいという気持ちがありました。彼らの日本への帰国の意図を聞きつけたハワイの人びとは、その実現を助けようと、たくさん寄付をしてくれました。アメリカには昔からそうしたボランティア精神が育っていたようです。

折良く上海へ向かう船がありましたので、彼らはそれに乗り込んで太平洋を西に向かったのですが、万次郎は日本の本土ではなく琉球で下船させてもらうことにしました。ふつうならば故郷の土佐で下ろしてくれるように頼むところですが、彼は、本土に上陸すると鎖国令を破った者として罰を受ける可能性があることを知っていたからです。

琉球は薩摩藩の支配下にはありましたが、中国とも交流のあった場所で、いわば、日本と外国との中間地点のような場所でした。しかも、直接琉球の港や海岸に船を着けてもらったのではなく、沖合10キロの海上で小舟に乗り移り、それを漕いで琉球に接岸したのです。

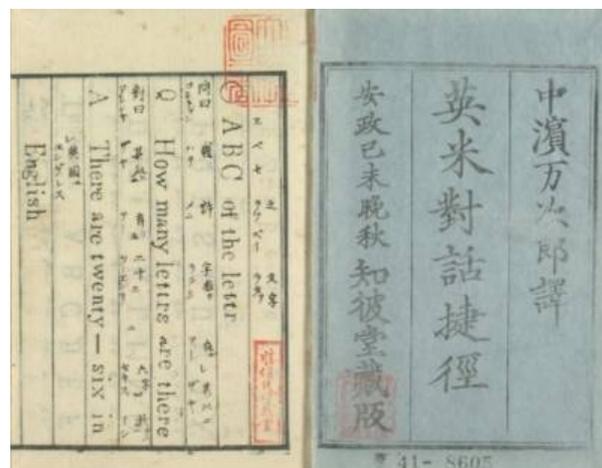
その小舟は、あらかじめハワイで買い入れて上海行きに船に積み込んであったものでした。小舟にはアドベンチャー号という名が付けられていました。接岸した際、現地の役人などに見つかった場合、自分の力で帰って来たという理由付けができるようにしたのです。漂流して、異国に渡ったが、自力で帰って来たことと釈明することによって、幕府からの咎めを受ける可能性を少なくしようとしたのです。琉球での取り調べだけでなく、故郷の土佐に到着するまでに、途中の鹿児島や長崎各地でも取り調べを受けたため、ようやく母親の待つ土佐の中の浜へ帰るまでに、さらに二年もの期間を要しました。

万次郎が郷里に帰り着いたのは、ちょうど黒船に

乗ったペリーが江戸湾に入って通商を求めて来た時期でした。当時、日本側には、アメリカの事情を知る人などほとんどおりませんでしたので、ここで万次郎の見聞が大いに役立ちました。アメリカがどのような国であるかを幕臣に説明することができたからです。万次郎は、彼らの目的は食料や薪炭の補給にあるのであって、領土的な野心は持たないことを強調しました。日本が開国に傾いて行ったのには、万次郎が伝えた情報の力が大きく与っていたと言えます。彼の存在がなかったとしたら、開国はさらに遅れていたことでしょう。万次郎のその後の人生については、類書におまかせすることにいたしまして、最後に彼の英語についてのお話をいたします。

■ジョン万次郎と英語

さて、万次郎は若くしてアメリカへ渡りましたので、英語には熟達しましたが、日本語を忘れてしまっておりまして。しかし、琉球から土佐まで移動する間に、各地の役所で取り調べを受けましたので、その間に急速に日本語能力を回復しました。



お配りした『英米対話捷徑』のコピーの、最初のページの Good day Sir. に、「グーリ デイ シャー」とカタカナで発音が示されております。一見すると、万次郎は正しい英語を知らなかったのではないかと思われる方もおられるかもしれませんが、そうではありません。高知弁では「おぬし」が「オンシャー」、「寒い」が「シャムイ」のようにシがシ

ヤに成る傾向があり、彼が滞在したアメリカ東海岸のベッドフォードにはポルトガル系の移民が多く住み、ポルトガル語では s の音が sh の音になる傾向が強いそうでございます。そこで、万次郎のカタカナ表記は、彼の耳に響いたものを忠実に記録したものと考えるとよろしいかと思えます。その例を二つ挙げてみましょう。

善 (よき) 日で ござる
グーリ デイ シャアー
 Good day Sir.

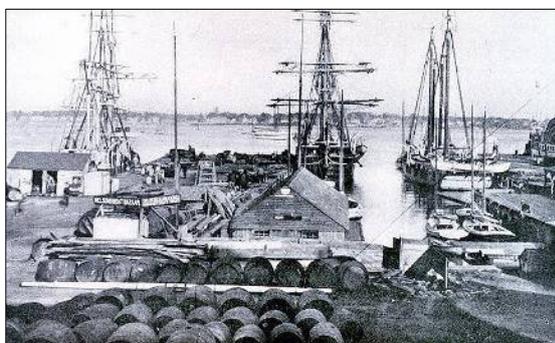
いい日でございますね。

おまへ ^{する}成こと ^な無けれども ^{しかながら}乍併 口まめなり
ユー ツー ナセン バッタ プラッラ
 You do nothing but prattle.

あなたは無駄話ししかない。

発音も訳文もなかなか良い感じです。

万次郎の死後も、中浜家と彼を助けた捕鯨船のホイットフィールド船長一家との交流は続き、今日もなお両家は親交を深めています。また彼の出身地である土佐清水市と、船長の家があったフェアヘブン市およびその隣町で捕鯨船の母港であったニューベッドフォードは姉妹都市となり、さらに大きな交流の輪を広げています。(拍手)



第 32 回研究発表会のご案内

会員各位のご参加をお待ちします。まだ会員になっておられない方もどうぞ。

- 日時：7月 21 日 (土) 午後 2 時-4 時
- 会場：平河町 Mercury Room
(クオリティ(株) 6 階会議室)
(東京都千代田区平河町 1-4-5 平和第一ビル)
- 交通：地下鉄・有楽町線麴町駅 1 番出口より徒歩 2 分。地図は、
<http://www.quality.co.jp/> どうぞ。
- プログラム
 - ① 第 12 回ジョーク・コンテスト
司会=田村公雄 会員
 - ② 研究発表「リンゴと老兵—ことわざのもじり」
豊田一男 会員
- 参加費：会員・非会員とも 1,000 円。
- 研究発表会終了後、近くの喫茶店で交流会を開きます。こちらにも、どうぞご参加ください。
- 問合せ先：renraku@eigojoker.com

第 12 回ジョーク・コンテスト出題作品募集

- 要領：
 1. 出題は、お一人一題とします。
 2. 長さは、一題 30 WORDS 以内 とします。
(評決が同数となった場合には、語数の多い方を上位とします。)
 3. 必要と思われる場合には、「笑いのツボ」やイラスト・写真などを添付してください。
 4. コンテストは、7月 21 日(土) 午後の、研究発表会で行われます。(司会=田村公雄 会員)
 5. 当日の研究発表会に出席できない方も、応募できます。
 6. 結果は、*We, Jokers* No.32 Joke Contest Supplement 紙上でも発表されます。
- 宛先：mmsagawa403@s6.dion.ne.jp
- 締め切り：2012 年 7 月 8 日(日)

WE, JOKERS No.31

英語のジョークを楽しむ会 (Joke-Loving Club) 会報

発行日：2012 年 6 月 30 日
 発行人：世話人代表 宮本倫好
 編集人：佐川光徳
 発行所：英語のジョークを楽しむ会
 〒102-0093 東京都千代田区平河町 1-4-5 平和第一ビル
 クオリティ株式会社 気付
 TEL:03-5275-6121, FAX:03-5275-6130
 問合せ先：renraku@eigojoker.com

